

会報

TUWV
OB会

— 岩魚ちゃん —

館岡淳 (5期)

秋田の民話の八郎物語の二節に、
 「岩魚をやくと、いいにおいがあったりいっ
 ぱいにひろがって、八郎の腹の虫がぐう
 ぐうとなりだした。はじめは大きな鼻
 をぺかぺか動かしてそのにおいを胸のし腹へ
 すいこんでいた八郎も、もうとてもがま
 んがでなくなつた。やまたての岩魚
 を一ひき、手にとるがはいか、ぺろっとたい
 らけてしまった。ところがこの岩魚の味と
 きたら、八郎が今までくたしたの魚より
 うまい。腹の虫はいよ／＼ゆめきたりて、
 頭をふったり腹をおさえたり。しさいに
 は足をばたく／＼させてこらえていたが、
 ーとあります。友達の岩魚までた
 べた八郎は意になつてしまい、十和田湖の
 主になつてしまったのですが、南祖坊に
 進められ、八郎湯の主になつたという話です。
 私の岩魚との逢引きは4月に始まり
 ます。いつもは4日に出發、5日に

目的の沢の入口につく。この沢は大平
 小(二七二m)の南側にあり、昭29年の
 とろ分の一では銅、軌道、学校の記号
 があるのですが、今は細い一本道がす
 かにある程度。30分くらい歩いて沢へ
 おります。釣りはじめは、まだおぼけてい
 て、ときどきむく／＼かえる。春先など
 キンチデミになり、メガネを落したとき
 などいっぺんに目がさめ、しばらく大変で
 す。はじめの一匹を釣りあげるまでは
 なか／＼落ちつかない。そろ／＼と水際
 に近づき、グラス竿に付掛を、そして
 ミミズをついて「ミミズちゃん、食べられず
 に命をおとすのは本望ではあるまい。ピ
 ンピンはぬて食べられるんだよ」とい
 う。そ／＼と竿を出し、反応をみる。二度、三
 度流しても一向にあたりがない。「ミミズ
 はあたりが遅いからな。ここには必ずい
 る。ここにいずしてどこにいる。やがてツン
 ツン。ツ。ス。とでも書けないか、これ
 かたまらなくシビレル。「きたか」岩魚
 は一度エサを喰べるとほとんどのつれる。
 だが、ツンツンとくれればもうつれたも同
 じなのだ。それでも、あわてていきおい
 よく引き抜くものだから、糸は木に引
 っかけり、エモノは木にぶらさがることか

多い。「ハッハッ、やった／＼」スルツとし
 たエモノをビクにおさめる。大物は、勝
 手にビクの穴から出てくるから、フキの
 葉でもつ／＼こんでおかぬといけな
 い。いつも一匹釣ってから朝めしを食う。
 つれないとそれだけ遅くなるのだが、食
 べたことぬたことは一度もない。山を歩
 くときは地図をとき／＼見るが、沢では
 ほとんどみだしたことがない。はじめに人の
 足跡があるかどうかをみる。この沢では
 カモシカにときどき会うし、足跡がとて
 も多い。それから水の色とか、魚の出
 具合、川虫などを見ても、まわりの山
 とか沢などあまり見ることがない。昼
 近くになると、ワラジをつけていても
 滑って、うまく釣れないようになってく
 る。ビクが重くなつて腰のふらつくせい
 もあるのだが、のどがかわいて腹のへっ
 ていることに気づいて、屈めしにする。
 ついでにエモノの腹をさいて内臓をと
 り出し、ビクがいつ／＼のときはビニル
 に入れて、川底にうめておく。なかな
 かこんなことをする機会はないのだが、
 原則として上流に釣りのぼるから
 瀬原にいて、丈夫のように、上下してい
 るヤツの頭にエサをおくと、見事

に食ってくれるときもあるし、いつも
あいさつだけのヤツもいる。真夏に
は、釣っているところへカモシカの子供
が水浴びにきたり、水鳥のヒナがバタ
バタ通ってダメになることもある。

4じごろになるといよ／＼バテ／＼
で、納竿。ビウの軽いときは山菜を
ビウ一杯にしてかえることにしている。
エモノは同居人がロースターで焼く
のだが、大きいやつは入らぬといって
いつも小言をくらう。こんどは大物
はよけて小物だけを釣るテクニク
をマスターしよう。エモノは塩焼き、
甘露煮、だし、にしているが、今じゃ
鼻についてあまり食う気がしない。

—記念遠征—

北海道

片野雅至(9期)

遠征というと大げさになるが、ふだん行け
ないような遠くの山へ行く事位に理解
していただいて、この言葉を使わせていた
く事にしよう。

正式なタイトルは創立十周年記念
遠征「北海道」(利尻山・大雪山)と言
うのだが、略して記念遠征と呼んでいる。
このタイトルからわかるように、我々大隈
ワンダーフォーゲル部は、昭和四十一年十
月に創立して今年で十年目を迎え
る。それを記念して行なわれたのがこの
遠征である。当初は二十余名の大遠征
隊が出かける事になっていたので、この

二月に会社に大きな変化があり、我々
ラアの仲間が半数近く、特に若手部
員が去っていった。そんなわけで、最後
まで残ったと言うが、遠征に参加した
のは男ばかり八名。それも我こそは
ワンゲル部員なりと自称するものば
かりで、内六名は代表幹事(主将)

経験者である。上げ三十九才で下は
二十四才。現在の我部においていまこ
にベストメンバーでの遠征であった。
期間は七月三十日から八月八日までの十
日間、往はその名も有名なロッキード社

製のトライスターで名古屋空港から十
歳へ、目的地は利尻山と大雪山、日本
最北端と層雲峡などである。帰りには
昔小牧がしつりーで名古屋港まで。
今日はその中でも皆のあこがれの山

であり、遠征のハイライトでもあった
利尻山登山の様子をお伝えしよう。
夜行列車で箱内に着いた頃には激し
く降っていた雨も、船が出る頃頃には
あがったが、まだ風はかなり強く、

トンクのフェリーでも相当揺れかひどく、
今夜に予定している利尻山夜間登山
かできるかどうか心配しながら何も見
えない甲板で風と波しぶきに当たっていた。
利尻島の玄圃口 駕泊港のしきんぷ
場までの二十分、今にも降り出しそ
うな暗雲が飛ぶ空を見あげつつ急
ぎ足で歩いた。キャンプ場はさすがに
テントも少なく、数張の強風をさけ
るようにかたまっていた。広々と
した草原の湿った草だけが生きき
としていたのみで、テントのあたりには
影はない。強風の中でテントを張り終
えコンロに火がついた時、やっ／＼と皆の口
からいつもの冗談が出始めた。夕食後
は一向におさまる気配はなく、夜間登
山を決定できるかどうか微妙になっ
てくる、天気図をもとに皆で相談したか
簡単な結論は出なかった。というには、
天気は回復に向ってはいるものの、まだ
危ない。しかし、ここで予定を遅らせる

と、後羊の大雪山縦走にしゆ寄せか
 来る。十日間の山行といへども實際に山
 の中に行はるは五日間しかないのである
 から一日は重大である。計画の変更
 に金更が納得するまでにはかなりの時
 間を要したため、遠征のハイライトは利
 尻登山であることを充分に考慮し、
 夜間登山は中止し翌朝出発するこ
 とになった。

そして翌朝、キャンプ場の風はおさま
 ったが、利尻山の姿は依然として望めず
 上空の雲は西から東へかなり速く流
 れていたため、おはやこれ以上計画を遅
 らせることはできず、天気回復を祈
 つて登山を開始した。三合目の休憩
 所に着く頃には晴間もみえ、六合目
 ではすぐ近くの礼文島がみえ大歓
 声があがった。しかし、八合目の長官
 山避難小屋まで登っても頂上付近
 のガスは晴れず、強風が吹いているよう
 であった。頂上に近づくとつれ尾根は
 やせてくるし、風はますます強くなり
 がすでや、ケは濡れてくるし、今にも体
 が飛ばされそうになりながら、とに
 かく頂上まで付とがんばった。頂上は完
 全にガスの中であった。本来なら周囲

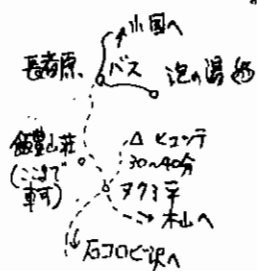
には真青の海があり、北には礼文島
 として東には北海道本土が見えるは
 ずなのに、あるのは古びたお宮だけ。
 遠征のハイライトにしてはあまりにも
 さびしかったため、それでも登ったといつ
 実感はあった。同じ道を八合目の小屋
 までおどると下界は晴。青い海に白い
 船がみえた。

カイラギヒュッテ

渡辺 英夫 (一期)

飯豊山の湯温泉よりいれたんをつめた
 鞆部に広さ2坪程のしれた小屋があります。
 カイラギクラブという金員40余名のクラブ
 所居の小屋で、木造、三角屋根、築後10年
 を経てもシランとしたものです。当時東北
 大に在学していたと、6人の女の友達を中心
 として兄弟姉妹、同僚、山仲間とキツズ式
 に会費を増やし、地元の長者原部落から
 土地を借りて(口と公園内の土地は借りられず)
 5万4千程で建てました。整地、基礎は土木
 専攻の金員がいるためクラブで行い、資材運
 搬も労力奉仕したのでこの程度の費用です
 だかです。昨秋のヒュッテ10年祭は大人
 30余名、小供20余名の出席があり、ヒュッテに

は入り切らないというので、泡の湯温泉で行
 う程でした。〇日会報にこのヒュッテのことを
 書いたのは、材木の運搬に瀬尾、渡辺(ユウジ)の
 両君の援助が多大なものであったこと、
 WV部卒後の私の山行のほとんどがカイラギ
 クラブの人達とのものであったこと、そして
 自分達の山小屋を作るといふのがいかに
 素晴らしいかを知らせられたからです。〇日
 会の集りにいつかこのヒュッテを使ってみては
 どうかですか。



近況報告

仙台に移って5月で1年、山行もままならず、
 泉、泉、蔵王の雪景色には、あこがれても
 体力を考えると、昨年と同期の朝倉と復
 に飯豊縦走をやって互いに体力の限界を感
 じて下山。温泉につかって悦に入ってきた。
 梅洋一郎 (五)

結婚して4年半、2人(女)と妻(子)の子持の身
 の上、会社のアルバイトが忙しなり、(?)月月の奥合
 が悪く医者通い、好きな酒も飲めず

ゴレデンウーイワも家でぶらぶら〜、そのうち元気になるから〜。藤田凱己(5)

今年の5月の連休はWVの合宿を御岳山に決定。最高の晴天に恵まれた2日に頂上付近を散策。西口白山更には北ア、ハケ岳、中ア、南アとして雪を抱いた富士山まで。片野雅至(7)

卒業後12年、全く山登りを休んでおりました。今年、夏は鳥海山と駒ヶ岳に登りました。あまり疲れずに登れたので内心「まだ大丈夫だね」と喜んでおります。現在秋田大学の医学部に在ります。栗林良正(1)

5月の連休に若佐氏らと飯豊に行ってみました。南ア、南却とか岩体奥の山を二日かかりにしてはや3年……。神山文範(12)

3月に仙台支店に転勤、スーぷりに見る雪をかぶったなつかしい山々、緑の美しい吾妻通り、変らぬうまさの売茶翁や源吾茶屋、産者下宿のおぼえ等、忘れかけていた学生時代の思い出が甦りました。こちらにきて高橋直樹や瀬尾さん、館岡さんに会いとてもなつかしかったです。真尾征雄(7)

こちら大阪ではお本君が小松の方へ行つてからは集まるのは新井、江原、松本、小生の4人だけ。

OB山行 “初冬の北ハケ岳”

初冬の静かな山行を味わい、夜の酒と古い顔を
楽しみに！

- 1 集合； 11月13日(土)夜，渋湯「渋御殿湯」
- 2 装備，食料； 全て各自の責任で用意のこと。
- 3 連絡先； 小原佑一 045-363-8735 (自宅)
045-822-5341
(味の素中研 LL2)

- 4. モテッレコース
 - (1) チョココース、家族向
茅野 ≡ 渋湯
 - (2) 散策コース
茅野 ≡ 渋湯 - 中山峠 - 高見石 - 渋湯
 - (3) 一般向
茅野 ≡ ビラタスロー・アウェイ - 山頂駅 - 縮枯山 - 麦草峠 - 高見石 - 渋湯
 - (4) 健脚向
茅野 ≡ 美濃戸口 - 赤岳鉱泉 - 硫黄岳 - 天狗岳 - 中山峠 - 渋湯
 - (5) 横断コース
小海線側より峠を越えて。

山の方もお子供が大きくなってくると仲々いっしょに行きません。もうちょっと大きくなれば子供連れでいっしょに行けるかもしれません。僕らの同期、10月10日目の集まりということでは仙台同窓へ集ります。いつも話す事です。皆あまり変らないうつです。でも会えるのを楽しみとしています。 宗村文司(6)

